

本当に疲れている時に聴く、のじやもふ妖狐の千歳さん

ク
ア
ト
□

■作品概要

△サークル▽

癒し庵もち猫（シナリオ／効果音／音声編集…クアトロ）

△ジャンル／年齢指定▽

バイノーラル音声作品／全年齢

△作品ポリシー▽

90m △詞文字数11,477文字

△舞台▽

現代の日本／とある山中、神社の本殿

■登場人物

△ヒロイン▽

名前 ……千歳（ちとせ／100歳）一人称…ワシ／二人称…おぬし

人物 ……稻荷神社に祀られている白狐／見た目は二十代中頃

足しげく通う聴き手をとある事情から呼び止める

至って真面目／母親の様な包容力がある

身長160センチ／B89W55H90（Fカップ）

△聴き手▽

社会人 ……疲れ切ったサラリーマン（25歳）

1…千歳との出会い（神社の参道／夜）1,095文字

（虫の鳴き声／林の環境音）

（聴き手の足音／とぼとぼ）

（左右から鈴の音）

（位置右・距離普通／有声音／やや小声）

おい、そこのお主（ぬし）…止まれ…。

そうじゃ、お主じゃ…。

（位置左・距離近い／無声音／小声）

おっと、驚かせてしまったかの？

すまぬすまぬ。

（位置正面・距離普通／有声音／やや小声）

ワシの姿が見えぬのでは、驚くのも無理はなからう。

今見える容（かたち）として顕現するでの。

待っておれ。

（左右から鈴の音）

（位置正面・距離普通／有声音／やや小声）

ほれ、これでどうじゃ、見えたかの？

うん？

なんじゃ、狐に摘ままれた様な顔をしておって。

まあそうなるのも無理もないか。

虚空（こくう）から突如、姿が顕わになったのじゃからな。

ワシか？

あゝ、どこから説明したらよいか…。

ワシはこの神社に祀られておる白狐（びゃっこ）じゃ。

おお、いい反応じゃ♪

そうでなくては姿を現した甲斐がないでの。

名を千歳（ちとせ）と言う。

御年千歳じゃ。

ああ…いわゆる妖狐（ようこ）、と言うやつじゃな。

うむ、昔話などに出てくるあの、じゃ。

ふさふさで大きな耳♪

もふもふの尾（お）♪

すらりと伸びる足♪

（自慢気に）ふふんっ♪

どうじゃ、これでワシが妖狐であると、お主にも伝わったかの？

なに、信じられぬじゃと？

ふふむ、どうしたものか…。

ならばこうしよう。

ワシが姿を現した訳を聞けば、信じてくれるかの？

うむ、では言い当てるぞ。

お主、連日この社（やしろ）を訪れておるじやろう？

元より熱心な参拝者じやと関心しておってな。

そんな者の願いを聞かぬ訳にはいかぬ。

じゃから願いを叶えてやろうと思うとるんじゃ。

そこでじゃ、お主の願いを…あゝ。

待て待て、ワシは神の遣い。

神通力があるでの。

尋ねずとも、お見通しじゃ。

お主は…ふむ…余程の心労を抱えておる様じゃな。

そして心の安らぎを求め、毎日ここを訪れておる…。

どうじゃ？

（自慢気に）ふふんっ♪

言うたじやろ。

この程度、ワシには容易い（たやすい）♪
そこじゃ。

ワシがその心労を取り払ってやる。

ん、なにをポカンとしておる。

言うたじやろう？

願いを叶えてやる、と。

どうじゃ、少し寄っては行かぬか？

なんじゃ、警戒しておる様じゃな。

ならばこうしよう。

緊張をほぐす、まじないをかけてやろう。

お主、そこで目を閉じてみい。

襲ったりせんから、ほれ、早（はよ）うせい。

（位置左・距離近い／無声音）

（弱く息を吸う音）すう…。

（耳ふー）ふゝゝ。

これ、動くでない。

（耳ふー）ふゝゝ、ふゝ。

（位置右・距離近い／無声音）

（弱く息を吸う音）すう…。

こちらもじゃ♪

（耳ふー）ふっふゝ。

（耳ふー）ふゝゝ、ふゝ。

（位置右・距離近い／有声音／かなり小声）

ワシについてくれば、こうした事をいくらでもしてやるぜ♪
お、どうやら心が揺らぎ始めた様じゃな♪

(呟く様に) もうひと押しじゃ♪

(位置左・距離近い／無声音)

(弱く息を吸う音) すう…。

(耳にはーと息を吹く) はゝ、はゝ。

(耳ふーはー) ふゝはゝ、ふゝはゝ。

(位置右・距離近い／無声音)

(弱く息を吸う音) すう…。

(耳はー) はゝ、はゝ。

(耳はー) はっはゝ、はっはゝ。

(位置右・距離近い／有声音／かなり小声)

どうじゃ、その気になったかの？

そうかそうか♪

そう来なくては面白くない♪

ではお主、そうと決まれば早(はよ)うゆぐぞ。

「どこへ」、じゃと？

野暮な事を聞くでない。

この様な参道の真ん中では落ち着かぬじゃろう。

じゃからワシの根城、本殿(ほんでん)へ案内してやる。

ついて参れ。

(鈴の音)

(聴き手の足音)

2…お清め耳拭き(神社の本殿／夜) 1,294文字

(位置左・距離普通／有声音／小声)

どうじゃ、ワシの根城は。

静かでよい所じゃろう。

（位置正面・距離普通／有声音／小声）

そうか、気に入ったか♪

最近は夜（よる）も暑く、寝苦しい日が続いておる。
そこでじゃ。

水を絞った布巾で耳を拭き、涼んではみぬか？

察するにお主、まだ警戒を解いておらぬじゃろう。

やはりな。

言っただじゃろう。

お主の心は見透かしておる、と。

動揺しておる事もお見通しじゃ。

じゃからその緊張を解くため、耳拭きをするぞ。

ほれお主、そんな所に立っただけでは拭けぬじゃろ。

近（ちこ）う寄らぬか。

（聴き手の足音）

（位置正面・距離近い／有声音／小声）

うむ、ではそこに座るがよい。

（聴き手が床に座る音）

（桶に入った水の音）

では早速、清めの水を絞った布巾で拭いてゆくぞ。

（左右交互に耳拭き音）

（位置正面・距離近い／有声音／かなり小声）

この社はな、取り囲んでおる山々も含めて神域なんじゃ。

その山から湧き出たのが、この水、清めの水じゃ。

邪気や穢れを祓うものとして、これより優れたものはないじゃろう。

どうじゃ、冷たくて、心地よくはないか？

そうじゃろうそうじゃろう♪

今宵も過ごしにくい暑さ。

しかもお主は疲れ切っておる。

それでは寝付けまいて。

じゃから、こうして冷えた布巾で涼を取る…。

時間や日頃の疲労も忘れ、ワシに身を委ねるがよい…。

大丈夫じゃ。

お主を邪魔するものなど、今はない。

言うたじやろう？

ここはワシの根城。

邪気も穢れも入っては来れぬ。

全身の力を抜き…ただただ悠然と…。

（しばらく布巾で耳を拭く音）

（弱く息を吸う音）すう…。

今度は両方の耳を、同時に拭いてゆくからの。

（布巾を濡らし、絞る音）

（しばらく布巾で両耳を拭く音）

（位置正面・距離近い／有声音／かなり小声）

（弱く息を吸う音）すう…。

なあお主…そのまま楽にして聴いておれ…。

お主は少々、頑張り過ぎる所があるの。

なあに不思議そうな顔をしておる。

言うたじやろ、神通力じゃ。

勤め先へ向かう道中での人混み。

勤め先での人間関係。

自宅へ帰ったとて道楽にいそしむ余地もない。

これまでよう我慢してきたの…。

日頃の疲れ、少しは取れたか？

そうか、ならばよい♪

先程よりも顔色が色づいてきておる。

淀んでいた血の巡りが、よくなった証じゃ♪

ではもう少し、耳拭きを続けるぞ。

(しばらく布巾で両耳を拭く音)

(位置正面・距離近い／有声音／かなり小声／ゆっくり)

(弱く息を吸う音) すう…。

この神域で湧いた清めの水で、邪気や穢れ、疲れを祓っておる。

お主は今、この神域と一体化しておると言っても、過言ではない。

山の息吹…。

木々の揺らぎ…。

川のせせらぎ…。

川はやがて大海へと通じ…そして雨となり…また山へ巡る…。

歳月をかけ…幾多も幾多も巡り…循環しておるのじゃ…。

そこにはお主、人間もまた含まれておる。

自然の環(わ)。

命の環。

その環にとって、ワシやお主はちっぽけなものじゃ…。

ああそうじゃ。

妖狐であるワシでさえ、じゃ。

じゃがな、その内の何か一つ欠けるとどうなる？

そうじゃ…。

環は途切れ…途絶え…歪みが生ずる…。

その歪みこそ、邪気や穢れに隙を与えるのじゃ…。

ワシは長く生きておるからの…。

その様な歪みを、数え切れぬ程見てきた…。

その度に…歪みを正しておるんじゃ…。

色々な歪みを正してきたのう。

時には山々を削る様な豪雨から…。

時には水不足による干ばつから…。

時には不作による飢餓から…。

今回は…そう、お主じゃ…。

うん、なんじゃ？

ふふっ♪

礼なぞ要らぬ。

これが神の遣いたる、ワシの使命じゃからの。

それにな…ああいや、この話はやめておくとしよう。

とにかく、お主には英気を養い、帰ってもらう。

覚悟しておれ♪

(しばらく布巾で両耳を拭く音)

(位置正面・距離近い／有声音／かなり小声)

(弱く息を吸う音) すう…。

(小さく頷く様に) うむ。

そろそろよいじゃろう。

どうじゃ、お主も満足したかの？

そうかそうか♪

ならばよい♪

3…特別な耳かき（神社の本殿／夜）3,210文字

（位置正面・距離近い／有声音／かなり小声）

では次じゃ♪

なんじゃ、ポカンと口を開けおって。

言っただじやろう。

「歪みを正す」、と。

分からぬか？

まだ足りぬと言っておる。

うむ。

それ程、お主の歪みは深刻じゃ。

そこで、これじゃ♪

お主もよう見知っておるじやろう？

そう、耳かき棒じゃ♪

じゃがな、そこらの耳かき棒とは訳が違う。

どういう事か、知りたいか？

（自慢気に）ふふんっ♪

では教えてやろうっ♪

この耳かき棒はな、この社のご神木からできておるのじゃ。

安心せい。

切り倒してしもうた訳ではない。

いかなる木々とて、枝葉は落ちるもの。

そうして落ちた枝を削り、でき上ったのがこれじゃ。

秘めたる力が備わっておる、ご神木から成る耳かき棒…。

どうじゃ、特別じやろう♪

（自慢気に）ふふんっ、感心しておる感心しておる♪

ではな、早速耳を覗かせてもらうぞ。

なにを呆けておる。

その体勢では耳かきができぬじゃろう。

じゃからほれ、ワシの膝へこい。

なあに、構わぬ。

なんせ「特別な耳かき」、じゃからの♪

特別に、ワシの膝を貸してやろうと言っておる。

ほれほれ、早（はよ）うせぬか。

（千歳の膝に寝転がる音）

（位置右・距離近い／有声音／かなり小声）

どうじゃ、ワシの太ももは？

柔らかくて、滑らかで、心地よいじゃろ♪

（嬉しそうに）そうかそうか♪

では、耳かき、やっていこうかの♪

うん、なんじゃ？

ははん♪

こう暗（くろ）うてはよう見えぬ…と思うてるじゃろ…

（自慢気に）ふふんっ♪

お主、忘れておらぬか？

ワシが妖狐じゃと。

狐はな、夜目が利くのじゃよ♪

じゃから、陽が落ちた今も尚、よく見えておるという訳じゃ。

お主の耳の中も、はっきり見えておるぞ♪

安心して身を委ねるがよい。

では…やってゆくぞ…。

（耳かき音）

どうじゃ、特別な感じ、するかの？

(自慢気に) ふふんっ、 そっじゃろっそっじゃろっ♪
では続けてゆーぞ…。

(しばらく耳かき音)

(浅い鼻呼吸音／時折短い呟く様な台詞)

すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。
すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。

(弱く息を吸う音) すう…。

んっ…んんっ…よしよし…。

すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。
すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。
すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。
すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。

(弱く息を吸う音) すう…。

んっ…ふむ…ふふっ♪

すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。
すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。
すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。

(弱く息を吸う音) すう…。

痛くはないかの？

そうか♪

すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。
すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。
すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。
すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ、 すゝふゝ。

(弱く息を吸う音) すう…。

もう少し…よし…取れた取れた♪

(ここまで)

(位置右・距離近い／有声音／かなり小声)

ふふっ、お主、口が開いておるぞ♪

それほど心地よかったのじゃな♪

ああ、そのままでよいぞ。

縮こまってしまつては、肩に力が入ってしまうでの。

うむ。

今宵はお主をとことん甘やかすのじゃ。

お、察しがいいの♪

そうじゃ、耳かきで終わりではない。

覚悟しておれ♪

さてさて、話はしまいじゃ。

続きをしてゆくぞ。

(しばらく耳かき音)

(浅い鼻呼吸音／時折短い呟く様な台詞)

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

(弱く息を吸う音) すう…。

ふむ、これは中々…大物じゃな…よし♪

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

(弱く息を吸う音) すう…。

うん？

んんっ……ふふっ♪

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

(ここまで)

(弱く息を吸う音) すう…。

よし、もう目立った汚れはないの。

仕上げて梵天じゃ♪

うん、なんじゃ？

おお、気付いておったか。

うむ、この耳かき棒には梵天が付いておらぬ。

ならばこう、じゃ♪

ほれ、ワシの尾(お)で綺麗にしてゆくぞ♪

なんじゃ、そう身構えるでない。

それとも、ワシの尾では嫌かの？

ふわふわじゃぞ？

もふもふじゃぞ？

ほれ。

(耳に尾の先が当たる感じの音)

ほれほれ♪

(耳に尾の先が当たる感じの音)

ふふっ♪

どうやら辛抱堪らんようじゃの♪

ならば参るぞ…。

ふゝわ、ふゝわ、もゝふ、もゝふ。
 ふゝわ、ふゝわ、もゝふ、もゝふ。
 お主、耳にふゝつと息を吹きかけるでの。
 ふふっ♪

お待ちかねの、じゃ♪

(耳ふー) ふゝゝ。

これ、そう動くでない。

束の間、ジツとしておれ。

(耳ふー) ふっふゝ、ふっふゝ。

ふゝわ、ふゝわ、もゝふ、もゝふ。

ふゝわ、ふゝわ、もゝふ、もゝふ。

(耳ふー) ふゝ、ふゝ。

(位置右・距離近い／無声音／かなり小声)

のうお主、いい顔をしておるぞ♪

うむ、参道で出会った時とは、天と地程の差じゃ♪

(耳ふー) ふゝ、ふゝ、すう…ふゝ、ふゝ。

ふゝわ、ふゝわ、もゝふ、もゝふ。

ふゝわ、ふゝわ、もゝふ、もゝふ。

(耳ふー) ふゝゝ、ふゝゝ。

(耳ふー) ふっふ、すう…ふっふ…。

(位置右・距離近い／有声音／かなり小声)

うむ、綺麗になったぞ♪

では続けて反対側じゃな。

お主、寝返りを打ってくれるか。

(聴き手が寝返りを打つ音)

(位置左・距離近い／有声音／かなり小声)

うむ、こちらも綺麗にしてゆくぞ♪

(しばらく耳かき音)

(浅い鼻呼吸音／時折短い呟く様な台詞)

すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。

(弱く息を吸う音) すう…。

こちらの中々…やり甲斐がありそうじゃ♪

すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。

(弱く息を吸う音) すう…。

これは大物じゃな…よしよし…。

すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。

(弱く息を吸う音) すう…。

うん？

んんっ…んん…ふう…♪

すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。

(ここまで)

(位置左・距離近い／有声音／かなり小声)

のうお主よ、ワシは神通力を持っておる、そう言っただじゃろ？

じゃからお主がなにに悩み、なにが心労の起因たるか、承知しておる。

じゃが敢えてここで、話してはみぬか？

言葉に出し…誰ぞに告げる…。

そうする事で、気が晴れる事もある。

勿論話したくないならば、そのまま黙しておってもよい。

どうじゃ、試してみぬか？

そうかそうか、ならば聞こう。

(相槌)

うむ……うむ…。

ほう……うゝむ…。

うむうむ…。

(「」まで)

お主よ、よう話してくれたの。

そして今日(こんにち)までよう耐えたの。

偉いぞ♪

じゃが、もう我慢せずともよい。

目下のしがらみは忘れ…今宵はワシにすべてを委ねよ。

構うものか。

ワシをなんじゃと思うとる。

妖狐。

この世の者ならざる存在、神の遣いじゃ。

人間…つまりお主一人の邪気や穢れを受け入れ、祓う事など、容易い。

ふふんっ、そうじゃ、お言葉に甘えよ♪

では更に甘やかしてやろう♪

(しばらく耳かき音)

(浅い鼻呼吸音／時折短い呟く様な台詞)

すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ、すゝふゝ。

すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。

(弱く息を吸う音) すう…。

ふむ……おお、豊作じゃ♪

すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。

(弱く息を吸う音) すう…。

もう少し…もう…少し…よし…。

すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。

(弱く息を吸う音) すう…。

これで最後かの…。

すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。
すゝふう、すゝふう、すゝふう、すゝふう。

(ここまで)

(位置左・距離近い／有声音／かなり小声)

うむ、ではこちらも仕上げじゃ。

ふわふわもふもふしてゆくでの♪

ふわわ、ふわわ、もゝふ、もゝふ。

ふわわ、ふわわ、もゝふ、もゝふ。

(耳ふー) ふゝ、ふゝ。

ふわわ、ふわわ、もゝふ、もゝふ。

ふわわ、ふわわ、もゝふ、もゝふ。

(耳ふー) ふっふゝ、ふゝゝ。

(弱く息を吸う音) すう…。

だらしない顔をしておってからに♪

ふふっ♪

ふゝわ、ふゝわ、もゝふ、もゝふ。

ふゝわ、ふゝわ、もゝふ、もゝふ。

(耳ふー) ふっふゝ、ふっふゝ。

うむ。

これにて耳かきはしまいじゃ。

さて、次じゃが…。

うん？

うむ、次じゃ。

まだまだ歪みを正してゆくぞ♪

お主、寝たままで構わぬが、仰向けになってくれるかの。

(体勢を仰向けに動かす音)

4…不思議な音色 (神社の本殿／深夜) ㄣ文字

(位置正面・距離普通／有声音／かなり小声)

さて、次はの…あゝなんと言ったらよいか…。

ふむ…お主、「音」の持つ力を知っておるか？

そうじゃ、川の音…虫の音…様々な音があるの。

これらには少なからず、なにかしらの力が備わっておる。

うむ。

心を落ち着かせる音…。

心を高ぶらせる音…。

その効果は様々じゃ。

そこで今宵聞いてもらうのは、これじゃ。

ああ、お主からはよく見えぬかもしれぬな。

（盛り塩を指でザラザラ鳴らす音）

これで見えるかの？

これは、この社で清めた塩。

それを器に入れ、持ち寄ったのじゃ。

ふふっ、「さっぱり分かん」といった顔じゃな♪

まあ聞いておれ。

ここに、ご神木の落ち枝（おちえだ）を削った棒を刺して…。

（ザクザクサクサクというASMR／キネティックサンド）

どうかの？

ふふっ、子気味よい音が、心地よいじゃろう♪

そうかそうか、ならばよい♪

では続けるでの♪

ワシはしばらく黙しておる。

存分に心地よい音色に酔え♪

（しばらく左右に移動しながらのキネティックサンドの音）

（位置正面・距離普通／有声音／かなり小声）

（弱く息を吸う音）すう…。

ふふっ、効いておる効いておる♪

音による癒し、侮れんじやろ♪

うむ、それはなによりじゃ♪

じゃがな、まだ続きがあつての。

むしろここからが本番じゃ。

器に入れた塩をもう一つ…。

お、察しがいいのう♪

うむ、両耳同時に奏でてゆくぞ♪

思考を空（から）にし、音だけに集中するのじゃ。

ほれ♪

（しばらく両耳同時のキネティックサンドの音）

（位置正面・距離普通／有声音／かなり小声）

（弱く息を吸う音）すう…。

どうやら心の淀みも…随分と晴れてきた様じゃ…。

参道で見た顔とは大違いじゃぞ…。

表情が活き活きとしておる…。

ふむ、お主も実感しておるか…。

ふふっ…ならばよい♪

どうじゃ…まだ続けるか？

うむ、よかろう…ならば大盤振舞じゃ♪

（しばらく両耳同時のキネティックサンドの音）

（位置正面・距離普通／有声音／かなり小声）

（弱く息を吸う音）すう…。

さて、これくらいかの…。

なんじゃ、まだ足りぬか？

やってやりたいのは山々じゃが、夜（よ）も更けてきておる…。

これ以上の長居は邪気や穢れに中（あ）てられやすい…。

そうじゃ、今のお主は打って付けの的、と言うわけじゃ…。

じゃからの、しまいじゃ…。

ほれ、起き上がれ。

5：甘えてよいのじゃぞ（神社の本殿／深夜）5,261文字

（位置正面・距離普通／有声音／小声）

さてお主、どうじゃったかの？

心労は癒えたか？

うん、なんじゃ。

物言いたげな顔をしておって。

言うてみい。

（相槌）ふむ…ふむふむ…うゝむ…。

帰りとうない…か。

困ったのう…急に甘えん坊になってからに。

ふむ……ならば今宵はワシの根城で寝てゆけ。

なんじゃ、それ程までに浮かれる事かの？

ふふつ、そうか。

そうと決まれば、ほれ、心穏やかな内に早よう寝るぞ。

（呆れた様に）なんじゃ、まだ用か？

なに？

添い寝…じゃと？

それは互いに横になり、寄り添って寝る、あの添い寝か？

（言いかけて聴き手が抱き着いて来る）ふむ…ワシは構わぬが…お主…。

っ…！

（心音）

（位置左・距離近い／有声音／かなり小声）

こおら、なんじゃ急にっ。

離さぬかつ。

はあ、このままじゃと？

抱き着いたまま眠る…と言うのか？

やめい、ワシはお主の親でも想い人でもないのじゃぞっ。

(考え込む様に)

うゝむ…参ったの…。

んゝ……。

ふゝむ……。

(ここまで)

(ため息) はあ……。

まあよいじゃろう…。

(ワザとらしく棒読みで／本当は嬉しい)

はあっ、仕方がないのうっ。

今宵ワシはっ、お主の物じゃっ。

(ここまで)

はあ、お母さん？

なぜそうなるっ。

ワシは妖狐。

断じてお主のお母さんではな…。

ん…うゝん…ふむ……。

ふふっ、まあよい…。

お主のお母さんか…悪くはない♪

では坊(ぼう)よ、寝るぞ。

いつまでもこうしておって、眠れぬじゃろ？

横にならぬか。

離れたりせぬから、安心せい。

うん？

ワシの声を聞いておりたい…じゃと？

よせ、照れるではないか。

ふむ、落ち着く…か。

まあよいじゃろう。

ではこうしよう。

なにか一つ、話をしてやろう。

うゝむ…お、そうじゃ。

童（わらし）と子狐の話…はどうかの？

うむ、ではそうしよう♪

朗読パート

「童と子狐の登場人物」

童…遊んでいる間に森に迷い混んでしまった男の子

子狐…森で怪我をして動けなくなってしまった白狐の子

親狐…子狐の母親で妖狐

（心音）

（位置左・距離近い／有声音／かなり小声／絵本を読み聞かせる様に）

童と子狐。

ここはとある山中の森。

うつそうと茂る木々の中に、ポツンと一人、童がおった。

童は一人で遊んでおる間（ま）に、森へ迷い込んでしまった。

童「母上ーっ、父上ーっ。」

童は必死に叫んだ。

じゃが、返事があるはずもなく、童は途方に暮れておった。

それでも尚、童は呼び続けた。

童「誰かーっ、誰かおりませぬかーっ。」

やはり返事はなかった。

童は段々と恐ろしくなり、寂しくなり、今にも泣き出しそうじゃった。
するとその時、どこからともなく、声が聞こえた。

子狐「こーん…こーん…。」

童は同じく森に迷い込んだ者があると思い、辺りを見回した。

童「おーい、誰かおるのか？」

童は声のしたであろう方角へ問いかけた。
すると。

子狐「こーん…。」

間違いない、誰か迷い込んだのじゃ。

そう思った童は、声のする方へと草木をかき分け、進んだ。

少し行くと、草木が拓け、月明りがそれを照らしておった。

そこにおったのは、人間ではなく、白い毛に覆われた子狐じゃった。

童はピタリと足を止め、息を潜めた。

子狐がおる。

つまり近くに親狐がおる可能性が高いからじゃ。

子を守る親の警戒心は侮ってはならぬ。

童はそう教わってきた。

それが狐であろうと、獣は獣。

その場に緊張の糸がピンと張り、童は息を飲んだ。

先に口を開いたのは子狐じゃった。

子狐「ああ、よかった。誰か来ないものかと、ずっと待っていたよ。」

子狐は元氣のない声でそう言つと、伏せていた体を起こした。

そしてゆっくりと童の方へと歩（ほ）を進めた。

するとどうじゃ。

子狐は後ろ足を引きずっておるではないか。

童は思わず問うた。

童「お前、怪我をしておるのか。」

すると子狐は弱々しい声で返した。

子狐「お母様とはぐれていた所に、悪いカラスがやってきてね。

それで足を痛めてしまった。情けない。」

よう見ると子狐の後ろ足は、赤く染まっておった。

童は子狐に駆け寄り、他に怪我をしておらぬか見回した。

幸い、怪我をしておるのは後ろ足だけじゃった。

童「お前、今手当てをしてやるからな。」

そう言うとき童は、着ていた着物をグイと引っ張り、破いた。

そして子狐の後ろ足に破いた着物を巻き付け、手当てを施した。

子狐は感心して、こう言った。

子狐「随分と手慣れているね。」

童は照れくさそうに鼻の頭を擦ると、こう言った。

童「おいらには兄妹がたくさんおってな。

皆元気はいいが、怪我也尽きぬ。

その度においらが手当てしておるのだ。」

それを聞いた子狐は、なるほど、と納得して頷いた。

童はぱっぱと手当てを済ませると、小さくよし、と息をつき、言った。

童「これで一先ず大丈夫。しかし傷口を清潔に保たねばならん。」

そう言うとき童は辺りを見回し、ある一点に目を止めた。

そしてそちらへ駆け寄り、生えている草を採ると、戻ってきた。

童「これは解毒（げどく）効果のある草だ。」

そういうとき童は採ってきた草を手で揉み潰した。

そしてそれを子狐の後ろ足にあてがったのじゃ。

すると子狐は痛さの余り、悲痛に叫んだ。

子狐「こーんっ、いたたっ。」

痛がる子狐じゃったが、童は尚、採ってきた草をグイと押し当てた。

童「こうして布に草の絞り汁を吸い込ませるのだ。我慢しておくれ。」

そう言う童の言葉を信じ、子狐は痛みに耐えたのじゃった。
しばらくして、草を押さえていた手を緩めると、童はこう言った。

童「傷が熱を持つといけないが、これでもう大丈夫だろう。」
まだ少し痛みの残る傷口を見やると、子狐は童に礼を言った。

子狐「いやあ、ありがとう。もう駄目かと思っていたよ。」

童は照れくさそうに鼻の頭を擦ると、子狐を抱き上げた。

童「こんな拓けた場所では、またいつ他の獣に襲われるか分からぬ。

安全な場所を探そう。」

それを聞いた子狐は、ピンと耳を立てて言った。

子狐「それならこの先によい場所がある。

誰も住んでおらぬ小屋があるんだ。」

そう言う怪我をしていない前足で、小屋の方向を差したのじゃった。
子狐の案内に従いしばらく進むと、確かにそこには小屋があった。

童は念のため、戸を叩いて呼びかけた。

童「誰かおりませぬか。」

返事はなく、また人の気配もなかった。

童は慎重に戸に手をかけると、グイと力を込めた。

開け放たれた小屋には、誰もおらんかった。

童は慎重に歩（ほ）を進め、小屋へと足を踏み入れた。

やはり人の気配はない。

小屋の中、外も確かめたが、誰もおらぬ。

童はようやく「ふう」と息をつき、その場に腰を下ろした。

童「どうやら本当に誰も住んでおらぬようだ。

床には埃。足跡もない。安全だ。」

そう言う童は床の埃を払い、抱いていた子狐をそっと床へ放した。

子狐「ありがとう。人間の子。」

子狐はそう言うと、出会った時の様に床へ伏せた。どうやら疲れ切っている様じゃった。

童も同じく「参った」という風に、床へ大の字に寝転がった。

童「しかしどうしたものか。」

童は今後の行く末について考えておった。

童「今晚はここで休むとして、問題はその後だ。

助けを呼ぼうにも、手立てが思い付かぬ。」

すると子狐はピクリと耳を動かし、童に言うた。

子狐「きつとお母様が見つけて下さる。」

人間の子、明日の朝まで辛抱できるかい？」

すると童はそれまで「疲れ切った」という顔をしていたが、持ち直した。

童「へえ、お前のお母様とやらは鼻が利くのかい？」

童の問いに子狐は曖昧に答えた。

子狐「うーん、その様なものかな。きつと見つけて下さるさ。」

童は不思議とその言葉を信じたのじゃった。

なぜかは分からぬ。

じゃが、童は疲れ切っておった。

溜まった疲労と安堵した今、急な眠気が訪れたのじゃ。

それに抗う術もなく、童は眠ってしもうた。

翌朝。

小屋には真っ白い毛並みの、大狐が佇んでおった。

子狐はピクリと耳を立て、伏せていた身を起こした。

子狐「お母様だっ。」

すると、小屋の戸が自然と開（ひら）いたではないか。

そんな事が起こっているともつゆ知らず、童はぐっすり眠っておった。

大狐は童の傍らへ歩み寄ると、童の頭をグイと押しやった。

ようやく目を覚ました童は、目の前の光景に恐れおののいた。
見た事もない程、大きな狐であったからじゃ。

しかし童は一時（いつとき）の間（ま）の内に平静を取り戻した。
その大狐が、慈愛に満ちた、優しい目をしておったからじゃ。
そして童は察した。

それに勘付いたのか、子狐が嬉しそうにこう言った。

子狐「人間の子、もう安心だ。お母様が来て下さった。」

子狐は親狐（おやぎつね）に擦り寄ると、これまでの経緯を話した。
それを聞き終える前に、親狐は子狐を制した。

親狐「よいよい、承知しておる。」

親狐は童に向かうと、深々と頭を下げ、続けた。

親狐「人間よ、世話になったの。礼を言う。」

童は照れくさそうに鼻の頭を擦り、言った。

童「いやいや、大した事はしておりませぬ、お狐様。

傷も深くはありません故、ご安心を。」

すると親狐はもう一度頭を下げ、礼を言った。

親狐「人間よ、本当にありがとう。」

そして童の目を見据え、問うた。

親狐「人間よ、森で迷うておる様じゃの。」

ワシが出口まで案内してやろう。ついて参れ。」

そう言うとき親狐は子狐をひよいと啗え上げ、小屋を出た。

童は言われるまま、親狐を追った。

すると不思議な事に、森の中に一本の道が現れたのじゃ。

童は不思議に思い、小首を傾げた。

それもそのはず。

その道はただただ真っ直ぐ続いておったからじゃ。

はて、この様な道があっただろうか。

童はそう思った矢先、どこからともなく、親狐の声が聞こえた。

親狐「人間よ。ワシは普通の狐ではない。

いわゆる妖狐というやつじゃ。

これは神通力を使（つこ）うて話しかけておる。

じゃが化かしたりせぬから安心せい。」

童はおののきながらも頷いた。

親狐はそれを見て続けた。

親狐「お主。なんぞ礼をしたいのじゃが、望はあるかの。」

童は首を横に振ると言った。

童「いいえ、お狐様。おいらは当然の事をしたまででございます。

故に礼には及びませぬ。」

それを聞き終えると、親狐は少し間（ま）を開けて返した。

親狐「やはりな。お主はとても優しい子じゃ。

じゃが子を助けてもらうたのじゃ。

おいそれと帰しては、妖狐の名が廃（すた）る。」

それを聞き、童は考え込んだ。

そしてハッと妙案を思い付いた、という顔をしたのじゃ。

童「ではお狐様。子狐と馴染みの仲になりとうございます。」

親狐は意外な申し出に、目を見開いて驚いた。

親狐「お主は面白い奴じゃの。」

よかろう、世話になった我が子をよろしゅう頼むぞ。」

そう言うとき親狐はひよいと子狐を持ち上げ、童の顔の前へ差し出した。

そして嬉しそうにしている子狐が言った。

子狐「人間の子、よろしゅう。名を千歳（ちとせ）という。」

童も嬉しそうに返した。

童「お前と出会ったのもなにかの縁だ。

仲よくしよう、千歳。」

それからしばらく、童と子狐は楽しそうに話を続けたのじゃった。そして視界が拓け、森から出たと思ったその時じゃった。

なんと今来た道は、跡形もなく消え去ったのじゃ。

童は背後を振り返りポカンと口を開けておった。

すると親狐がこう言った。

親狐「化かさぬ、と言ったがすまぬの。

森を抜けるため、少しばかり力を使わせてもらうた。」

童は変わらず呆けた顔をしておった。

次に子狐が自慢気にこう言った。

子狐「お母様はとてつもない力を持っておられる。

驚くのも無理はない。」

ようやく我に返った童は、今起きたことを理解しようと努めた。

が、理解できるはずもなく、その努力は無駄に終わったのじゃった。

そしてとある事に気付いた。

それは見慣れた景色であつた。

なぜならば、童の家のすぐそばだったからじゃ。

童「不思議なものだ。あれだけ迷っていたのが嘘か真（まこと）か。」

感心している童に、親狐が言った。

親狐「ほれ人間よ、家族が心配しとるじゃろうて。

早う顔を見せてやれ。」

それを聞いた童は、思い出したかの様に駆け出したのじゃった。

こうして童は無事に家族の下へと帰った。

それからというもの、童と子狐は、仲よう遊び、学び、育った。

そうして時を経る内に、ある契（ちぎり）を交わしたのじゃった。

それは千歳からの案じゃった。

子狐「お主が困った時、迷える時、頼って欲しい。

この山、あの森すべてが狐の根城になっておる。

お主が助けを求めるならば、必ずや馳せ参じる。

それはお主だけには限らぬ。

お主の家族、あるいは後世まで守ると誓おう。」

童は驚いたという顔をして返した。

童「千歳、そんな大層な事、おいらは望んでおらぬ。

おいらはお前と仲よく過ごせたら、それで満足だ。」

すると千歳は首を横に振り、言った。

子狐「いいや、命を救ってもらったのだ。

それ相応の対価を払わせておくれ。」

童は一時（いつとき）困惑したが、すぐに笑顔になり言った。

童「そうか。お前の申し出なら断れぬな。」

童は照れくさそうに鼻の頭を擦り、千歳の頭を撫でた。

千歳は嬉しそうに尾を大きく振った。

童と子狐は強い絆で結ばれておった。

その縁は末永く続いたそうな。

おしまい。

（朗読終わり）

（少しだけ通常台詞）

（位置左・距離近い／有声音／かなり小声／語りかける様に）

のうお主…。

ふむ…寝てしまったか…。

お主の先祖には誠、感謝しておる…。

世話になったの…。

お主がここを訪れたのも…代々言い伝えられてきたからじゃろう…。
困った時、迷える時はここへ来い…と。

今日（こんにち）まで本によう頑張ったの…。

じゃが無理はするな…。

我慢もするな…。

あの時のように…身を寄せ合い眠ろう…。

今度はワシが、お主を守る番じゃ…。

じゃから安心して眠るがよい…。